

実践報告

学齡超過者のライフレビューブックの DVD化による効果

後藤 宏¹・長野恵子²

(福岡県立柳河特別支援学校¹, 西九州大学子ども学部心理学カウンセリング学科²)

(平成28年1月29日受理)

The effects of making DVD from a life review book described by a student with delayed education

Hiroshi GOTO¹ and Keiko NAGANO²

(¹*Fukuoka Prefectural Yanagawa Special Needs School*, ²*Department of Psychological Counseling,
Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*)

(Accepted January 29, 2016)

Abstract

The purpose of this study was to clarify the effects of making DVD from a life review book which was described by a male student with delayed education. The term 'student with delayed education' refers to an adult with disabilities who started his schooling late in his life because he was excluded from formal schooling in his school-age, and who couldn't attend school because of his age after the compulsory special education system was established in 1979.

We focused a student with severe physical disabilities who entered the middle school division of a special needs school after the age of 60. His life review book was completed based on the individual reminiscence therapy which was employed during Independent Activities in visiting education classes. Afterward the book's data was transformed from paper medium to digital pictures with a narration in order to be able to watch on television set. We held a small party with his family and his aiding staff to watch the DVD together. Evaluating and analysing their answers to our questionnaire about the DVD, we could find out some evidences of positive effects for both the student and the aiding staff.

Key words : Special needs education 特別支援教育
Student with delayed education 学齡超過者
Reminiscence therapy 回想法
Life review book ライフレビューブック
Effects of making DVD DVD化の効果

1. 問題と目的

学齢超過者とは、学齢期に就学猶予・免除され、1979年の養護学校義務制当時には年齢超過を理由に不就学となった成人障害者である。学齢超過者として義務教育を受ける対象とならず、取り残されたままとなっている人達は全国で25万人を超える（西日本新聞、2007）とも言われている。21世紀を迎え、特別支援教育の開始から8年が経過し、学齢超過者を受け入れる自治体は増えてきたが、そのための条件や内容等は各自治体の考え方により異なっている。

福岡県では2009年1月、県教育委員会より「学齢超過者に対する訪問教育実施要領」が示され、就学猶予・免除となっていた成人障害者にも学校教育を受ける機会が一部認められた。同県では、3月1日付けで一旦特別支援学校小学部第6学年に編入学し、卒業後の4月から中学部で週3回（1回2単位時間）の訪問教育授業が受けられる。県内の障害児者施設入所者に限定され、受け入れ人数にも制約があるが、中学部卒業後は高等部の受検による進学にも道が開かれ、実質6年間の学習機会を得ることも可能となった。

これまで学齢超過者を対象とした教育内容・方法等の研究は極めて少ないが、既に高年齢となっている学齢超過者に対しては、「高年齢期らしい授業のあり方」があるのではないだろうか。筆者は、前任校のD特別支援学校で訪問教育担当として3名の学齢超過者とかわり、高年齢期に効果的な授業のあり方を検討し、実践していく必要性を常に感じていた。

国内外で高齢者に特に有効といわれ、実践されている心理療法の一つに回想法（reminiscence, life review）がある。回想法は、アメリカの精神科医バター（Butler, R. N.）により1963年に提唱された高齢者を対象とする心理療法で、「クライアントが、受容的、共感的、支持的な良き聞き手とともに心を響かせあいながら過去の来し方を自由に振り返ることで、過去の未解決の葛藤に折り合いをつけ、そのクライアントなりに人格の統合をはかる技法」である。日本では、1990年代より黒川（1994）、野村（1998）らの草分け的研究と実践に端を発し、現在では病院、施設、地域等で広く適用され、治療、セラピーとしてだけでなく、アクティビティーとして施行される場合もある。

また、高齢者とのコミュニケーションを促進する

方法の一つにライフレビューブックがある。ライフレビューブックとは、回想法により一人一人の人生を振り返った内容を写真、新聞の切り抜き、その他一人一人にとって貴重な数々の記録物を用いて、口述の記録を交えながら、1冊の小冊子にまとめたものである。志村（2005）は、ライフレビューブックを手掛かりにしてさらに懐かしい思い出を深め、懐かしい資料を繰り返し眺めることにより、高齢者の心の中が整理できるとし、回想法における高齢者と援助者との語りによる交流には相互作用的な側面があり、いい聞き手によって、高齢者の語りがいい形で展開し、高齢者の教育的な内容を含んだ語りは、聞き手の学習効果をもたらすことを指摘している。さらに、同じような身体状況や同じ時代を生きてきた人でも、一人一人感じることや物事の受け止め方には大きな違いがあり、ライフレビューブックの作成・活用に当たっては、一人一人に合わせた個別化が重要とされる。

特に、一人一人の成育歴や特性等に応じて視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚など五感を刺激することは、記憶を引き出す手がかりとなる可能性がある。しかし、ライフレビューブックの作成や活用等の効果に関しては、学生と認知症高齢者による介護福祉実習における尾台（2006）の実践等はあるが、高年齢の障害者を対象とした研究は少ない。

後藤（2014）は、これまでかかわった3名の学齢超過者との訪問教育の取組を通して、①人は年齢に関係なく、常に「学びたい」という思いがある、②教育は、年齢に関係なく、人を成長させる力がある、③人はかかわりあうことで、影響を与え合い、お互いの認識も深まるといふ、3つの視点から教育的意義を整理している。また、後藤・長野（2015）は、60歳を超える学齢超過者に対して、訪問教育授業で回想法を実施し、回想内容や様子等の記録を基に評価・分析を行い、取組の経過に伴う変容等を整理し、分析結果から高年齢の学齢超過者の訪問教育授業で回想法に取り組む意義を明らかにしている。しかし、同研究では、回想内容をもとにライフレビューブック作成に向けた取組に発展させるまでには至らなかったこと、観点の明確化や家族・施設スタッフ等の評価等を含む客観的な評価・分析方法を検討すること等が課題として挙げられている。

筆者は、後藤・長野（2015）により報告された60歳代の重度の身体障害を有する学齢超過者に対して、授業で関わるのが困難となった後も、お互いに時

間を合わせ、休日等を利用しながら本人のニーズを十分に確認した上で、ライフレビューブックの作成や活用に継続して関わってきた。

そこで、本研究では、60歳を過ぎて特別支援学校中学部に入学した学齢超過者に対して、訪問教育で取り組んだ回想法をもとに作成されたライフレビューブックをDVD化することにより、当事者自身及び家族・支援者に対する効果を明らかにすることを目的とする。

2. 実践経過

1) 対象者の概要

対象者Aは、障害者支援施設に入所する60歳代前半の成人障害者である。3人きょうだいの第3子としてB市に生まれた。5人家族であったが、父母と実兄は既に他界し、生存する身内は実姉一人である。少年期に他市に引っ越した時期もあったが、その他の期間はB市内の自宅で家族と同居していた。きょうだいが独立し、父親の他界後も、しばらくは母親と一緒に自宅で過ごしていたが、2000年代初頭に施設が新規開設されたことに伴い、50歳代前半に入所した。脳性麻痺のため、ADLは全面介助であり、常時車椅子での移動や日常生活の介護を必要とする。言語面での表出機能等に課題はあるが、双方向のコミュニケーションが成立し、思いや考えを自分の言葉で意思表示することができる。

Aは学齢期に就学を猶予され、これまで学校教育を受ける機会はなかった。しかし、同じ施設の入所者Cが一足早く学齢超過者としてD特別支援学校の訪問教育授業を受けることになり、「自分も学校に行きたい」という思いが益々強まり、施設の担当職員に思いを伝え続けた結果、Cの受け入れから3年後、60歳代前半になって、ようやくAはD特別支援学校中学部への入学が認められた。

2) 訪問教育における回想法の取組

(1) 訪問教育授業の概要

訪問教育は、通学が難しい児童生徒のために、教師が家庭または施設に向いて教育を行う制度である。筆者は、前任校（D特別支援学校）で、Aが中学部に入学した20XX年度の担任として、毎週3回、午後からの2単位時間（90分間）を、Aの入所先の施設で授業を行った。

(2) 回想法実施前の経過

経過の詳細については、後藤・長野（2015）に掲載されているが、Aは、入学当初より「自分の言葉が、もっと人にわかるようにしたい」という思いが強く、「日本語をより正確に理解し、はっきり使えるようになってほしい」という学習への期待もあり、様々な学習機会を捉えて言葉によるやり取りを丁寧に行うことを心掛けた。

毎学期の始業式と終業式には、本人からの挨拶を取り入れた。挨拶は事前に授業の中で考え、Aが言いやすい言葉を選び、練習を重ねた。また、より伝わりやすくするための工夫をAと話し合い、挨拶文も出席者に配布して、各自がAの挨拶を聴きながら内容の確認ができるようにした。

2学期は、「自作の新聞（以下、『新聞』）をつくりたい」「多くの人に自分のことを知ってほしい」というAの希望を取り入れた。Aに関するクイズ掲載と回答募集等により、他の生徒や教師が次号の「新聞」発行時の解答を期待して待つようになるなど、お互いがつながり合い、理解し合うきっかけにもなった。

3学期の授業では、高齢者の心理療法として取り組まれている回想法を取り入れて、昔を振り返りながらコミュニケーションを図った。特に、「ライフレビューブック－高齢者の語りの本作り－」（志村、2005）に掲載された1950～60年代前後の写真やライフレビューブックの内容等に興味を示し、最終的には回想法で振り返った内容を自分だけの1冊の本として作成することを目指した。

(3) 回想法の取組

回想法の実施に当たっては、1対1のコミュニケーションを大事にするために、訪問教育授業の自立活動の時間を活用し、個人回想法を取り入れた。計11回にわたり、回想の内容や様子を毎回文章化し、授業の経過に伴う変容やかかわりの中での気づきをもとに評価・分析を行った。

20XX+1年1月下旬より2月下旬までの期間中、回想を重ねることにより、導入期（第1回～第3回）、展開期（第4回～第9回）、発展期（第10回～第11回）に分類・整理され、話題や会話の内容も変化することが明らかになった。

導入期は、主体的、意欲的に取り組めるように、A自身が最も振り返りたい時期、内容等を回想のテーマとした。父親の転勤に伴い、家族5人でE市に引っ越した1950年代後半のことが挙げられ、主に

テレビに伴う話題と家の中での生活の様子等について、積極的に語られた。

展開期では、主に「家族との関係」に焦点を当てて、本人及び姉により提供された写真（家族と二人または三人で撮影された少年期のスナップ写真）等も活用しながら、父・母・兄・姉一人一人との思い出が振り返られた。

発展期では、日常の暮らしの中で家族全員が揃って一緒に活動した場面等を想起することにより、家族一人一人との関係性が捉え直された。また、小さい頃の兄や姉を通して抱いていた学校のイメージとともに、これまでA自身が持ち続けてきた学校に対する思いや友だちの存在等を振り返り、回想法に取り組んだことによる気持ちの変化と、これからの目標としたい思い等が語られた。

全11回の回想法終了後の授業では、ライフレビューブック作成に向けた構想が練られた。本のタイトルは「思い出と今」とし、表紙は昔と今のAの写真と並べて掲載すること等が決定したが、回想内容をもとに年度内に本格的な取組へと発展させるまでには至らなかった。

3) ライフレビューブックの取組

(1) ライフレビューブックの作成に当たって

ライフレビューブックの作成に当たっては、回想法の取組が終了した2月から開始し、当初は授業の中で主に制作スケジュールの計画や構成、目次の確認、A自身がブックの中に掲載したい内容等を整理するための時間として活用した。しかし、年度末に筆者のD特別支援学校からの異動が決定したため、Aの意向も確認した上で、新年度からのライフレビューブックの作成については、訪問教育の授業とは切り離して、筆者が休日等を利用して施設を訪問し、引き続きかかわることになった。

なお、20XX+1年4月より定期的に筆者が施設を訪問して、Aとかかわりながらライフレビューブック作成を目指すことについては、事前に本人、家族、施設及びD特別支援学校の関係者に報告し、了解を得た。

(2) ライフレビューブックの作成

ライフレビューブックの作成にむけて、全28回の活動場面が設定された。1年次（20XX+1年3月まで）に行った7回の回想は、担任として訪問教育授業の中でかかわり、2年次（20XX+1年4月から20XX+2年3月まで）は、21回に渡り、休日等

を利用して、毎回1時間から1時間半程度の活動に取り組んだ。「ライフレビューブック－高齢者の語りの本作り－」（志村，2005）の付録CDの中のライフレビューブック・フォームを活用し、毎回Aの思いを確認しながら、協力者である筆者が項目ごとに1ページずつパソコンで文章等を入力した。

目次には、①作成者のプロフィール、②協力者のプロフィール、③家族のこと、④住んでいた場所の思い出、⑤私にとってのテレビ、⑥小さい頃の思い出、⑦施設に入るまで、⑧学校のこと、⑨伝えたいこと、⑩今とこれから、が挙げられ、全23ページに内容が整理された（図1）。

| | | |
|--------------------------|-------------|-----------|
| <input type="checkbox"/> | 作成者 | 1 |
| <input type="checkbox"/> | A | さんのプロフィール |
| <input type="checkbox"/> | 協力者 | A |
| <input type="checkbox"/> | 後藤 宏 | さんのプロフィール |
| <input type="checkbox"/> | 家族のこと | |
| <input type="checkbox"/> | 住んでいた場所の思い出 | |
| <input type="checkbox"/> | 私にとってのテレビ | |
| <input type="checkbox"/> | 小さい頃の思い出 | |
| <input type="checkbox"/> | 一日の生活 | |
| <input type="checkbox"/> | 正月の思い出 | |
| <input type="checkbox"/> | 外出した時の思い出 | |
| <input type="checkbox"/> | 施設以外の人とかかわり | |
| <input type="checkbox"/> | 施設に入るまで | |
| <input type="checkbox"/> | 学校のこと | |
| <input type="checkbox"/> | 伝えたいこと | |
| <input type="checkbox"/> | 今とこれから | |

図1 作成したライフレビューブックの目次

「家族のこと」や「住んでいた場所の思い出」のページには、家族から提供された昔の写真が掲載された。文章については、回想法で振り返った内容をもとに再度確認したが、前回の回想では話題にならなかった生活感あふれる情景が新たに想起されるとともに、「本当にありがたかった」、「可哀想だった」、「いつも感謝している」等、家族を思いやる気持ちや感謝の言葉も示された。

「私にとってのテレビ」や「小さい頃の思い出」のページでは、「ライフレビューブック－高齢者の語りの本作り－」（志村，2005）より1950～60年代前後のテレビ、時計、かまど、洗濯板などの懐かしい写真が掲載されるとともに、実際に当時見ていたテレビ番組や家族とかかわる中での1日の生活パターン等が詳細に想起され、記載された。

「施設に入るまで」のページでは、当時お世話になった人達の名前や支援を受けていた内容をはじめ、自分自身の障害のことや施設入所に至るまでの経緯や思い等についても、回想法の聞き取りの時よりも詳細に語られ、記載された。

「学校のこと」や「伝えたいこと」では、学校に行けなかった頃の生活や思いとともに、学齢超過者として学校に行けるようになり、授業で様々なことを勉強するようになってからの思いが、改めてしっかりと語られた。「伝えたいこと」のページの最後に記載されたAの言葉を表1に示す。

表1 伝えたいこと（学校への思い）

私は50年以上待つことになったが、学校に行けて本当に良かったと思っている。私のように今まで学校に行けなかった人たちに、これからも「学校に行きたい」という気持ちをもち続けてもらいたいし、一人でも多くの人たちが学校に行けるようになってほしいと思っている。

（ライフレビューブック 「思い出と今」より）

最後に「今とこれから」のページの作成に取り組んだ。20XX+2年3月の作業となったこともあり、中学1年次から作成している「新聞」の継続発行や修学旅行への期待、高等部受検に向けた抱負等、中学2年次を終えて中学3年次を迎えようとしている時期特有の思いが語られた。さらに、「これからも、いろんなことがあると思うけど、一つ一つ向き合っ、前に進んでいこうと思っている。」という未来思考の文章でまとめられた。

(3) ライフレビューブックの作成を終えて

20XX+2年3月下旬、すべてのページの文字や写真等の入力とレイアウトが終了した。印刷した各ページを1ページずつ専用のファイルに綴じていき、全23ページのライフレビューブックの作成を一通り終えることができた。

改めて1ページずつAに見せながら筆者が記載内容を読み上げ、すべてのページの内容確認を行った。Aは家族のことやテレビのこと、小さい頃の思い出等には時折笑顔を見せたり嬉しそうに声を出したりしながら話を聞いていた。さらに、ライフレビューブックの作成を終えた感想を尋ねると、「いろいろなことを思い出して良かった。」「施設の職員や学校の先生たちにも読んでもらいたい。」「自分のことをもっと知ってほしい。」等の思いが語られた。

4月に入り、幼少期からの写真の提供や記載内容の確認等で協力していただいたAの実姉宅を訪問し、持参したライフレビューブックの内容確認を依頼するとともに、今後の活用に向けた相談を行った。Aの実姉からは、「Aが『こういうふうに考えているのか』というのがわかった。一部事実と違うところもあれば、自分（姉）自身が知らないこと、気づいていなかったこともあった。」「それでも、私（姉）

には、私の捉え方があり、私の人生がある。」等の思いが語られた。内容面での明らかな間違いについては修正し、ライフレビューブックの配布先については、改めてAと筆者とで調整することを確認した。

実姉からの指摘部分を修正し、完成させたライフレビューブックは、本人、実姉、筆者の他、施設用、学校用、その他関係者用として限定して渡すことになった。作成の趣旨や経過等がていねいに伝えられるよう、Aまたは筆者が直接手渡すこととし、20XX+2年4月中には、対象者全員に配布することができた。

4) ライレビューブックのDVD化の取組

(1) ライレビューブックのDVD化に当たって

ライフレビューブック完成後の状況を把握するために、筆者は、関係者へのライフレビューブック配布から約1ヶ月が過ぎた20XX+2年5月下旬に施設を訪問し、Aと面会して表2に示す内容について質問した。

表2 ライレビューブック完成後のAへの質問

- ① ライレビューブック完成後には、どのような反響があったか？
- ② いつでもライフレビューブックを見ることができているか？
- ③ ライレビューブックを見やすくするための工夫はないだろうか？
- ④ ライレビュー作成後、望んでいることや協力してほしいことはないか？

その結果、①A自身はライフレビューブックに対する周囲の反応が少ないと感じており、せめて実姉や学校の担任等のライフレビューブックを手渡した人からの感想は聞いてみたいと思っていること、②4月にライフレビューブックの完成版を筆者と一緒に確認して以降、自分では1度も見ていないし、見せてほしいと申し出る施設スタッフもいなければ、自分から施設スタッフに見たいという要求を出す機会もなかったということが明らかとなった。特に、重度の身体障害を有するAの場合、ライフレビューブックを見るためには、誰かに依頼して本を開いてもらったり記載内容を読み上げてもらったりしなければならないということに改めて気づかされた。そこで、必ず誰かがAの側において「本」を見せてくれるのではなく、同じ内容もテレビ画面で見たほうがわかりやすく、自分のペースで見ることができるのではないかと考え、③ライフレビューブックの内容をテレビで見ることができるようDVD版の作成

表3 中学部入学以降、DVD版完成上映会に至る経緯と具体的取組

| 経過 | Aとの関わり | 筆者自身に関すること | 家族との連携 | 支援者間の連携 |
|---|--|--|--|--|
| 20XX年 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 | D特別支援学校中学部入学 様々な学習機会を捉え、言葉でのやり取りを重視(1学期) 本人の希望により、「新聞」作り開始(2学期) | Aの担任として、週3回施設にて訪問教育授業を開始 回想法を学び、Aに対する授業の中での活用を検討 | 実姉夫妻がAの入学式に出席(筆者とも顔合わせを行い、以後必要に応じて協力を要請) ※授業の中でAの写真が必要になった際は、実姉より提供(以後、回想法やライフレビューブックにおいて活用) | 施設の一室にて授業開始(施設担当職員、A担当職員との日常的な連絡・調整) ○他の学校職員との連携(夏季休業中のゲストティーチャーとしての授業協力) ※学校行事やスクーリング等での協力要請(施設・学校) ※2学期以降の「新聞発行」時の掲示協力(施設・学校) |
| 20XX+1年 1月 2月 3月 | 回想法の取組開始(3学期) 回想法終了(2月下旬) ライフレビューブック作成開始 | ※自立活動の時間を活用し、計11回に渡り回想法を実施 筆者の異動が確定 | | 筆者の異動が確定し、次年度の対応・体制等を検討(学校) |
| 20XX+2年 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 | 中学部2年に進学(担任交代) 授業 ライフレビューブック ※新任担任による対応 ※授業とは切り離し、毎回1時間～1時間半、定期的に筆者と作成(2年次:計21回活動) 前年度分も含めると、計28回の活動場面設定 ライフレビューブック完成 | Aの意思を確認し、担任外の立場でライフレビューブックの作成に協力することになる。 ※家族、施設、D特別支援学校の了解を得て、取組開始 ※特に家族への協力要請(写真等の提供、記載内容の確認等) ※必要に応じて、施設、学校とも連携を図る ※完成後のライフレビューブック配布先、活用方法等の検討 | 実姉夫妻に異動の報告とライフレビューブック作成のための継続的関わりについて了解を得る ※相談や調整が必要な時は、筆者と実姉とで連絡を取り合う ※実姉には、定期的にライフレビューブックの内容確認を依頼(3月末から4月当初の最終確認後に指摘事項を修正し、完成) ※配布先、配布冊数の相談(A、家族、筆者、施設、学校他、関係者の6冊に決定) | 施設関係者も異動の報告とライフレビューブック作成での継続的関わりについて了解を得る ※新任とは、必要に応じて連絡を取り合い、協力・連携する ※施設には、訪問日時を連絡し、A本人の予定の確認・調整等を依頼(場所はAの自室) ※学校、施設にライフレビューブックの完成報告と配布に当たったの確認事項を説明 |
| 20XX+3年 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 | 中学部3年に進学 授業 ライフレビューブック完成後の反応聞き取りとDVD版作成開始 ※2年次担任の継続 ※定期的に筆者と作成・確認(3年次: DVD完成まで7回活動) DVD完成上映会参加(下旬) ※上映会後の聞き取りへの協力 高等部入学者選考検査 中学部卒業予定 | ライフレビューブック完成版を関係者に配布 ※Aへの聞き取り後、DVD版作成に向けて関係者と調整 ○内容確認: A及び家族 ○DVD編集・作成の協力依頼 ○上映会の企画・準備 DVD完成上映会開催(下旬) ※上映後の面会(A、家族) | 実姉にライフレビューブック完成版の手渡し(4月中旬) ※Aの思いを報告し、DVD版作成の取組への了解を得る ※実姉夫妻にDVD版(原版)の視聴・確認を依頼し、上映会開催の了解を得て出席を要請 DVD完成上映会参加(下旬) ※上映後に実姉宅を訪問 出席者及びAの感想を報告 今後についての意見交換 | A同席のもと、ライフレビューブック完成版の手渡し(学校用、施設用1冊ずつ) ※Aの思いの報告とDVD版作成、上映会の計画を説明 ※学校、施設の協力を得ながらDVD上映会を計画・準備 DVD完成上映会協力(下旬) (運営協力: 学校、施設) |

を提案したところ、Aからも「できるのであれば、お願いしたい」という意向が示された。さらに、④Aが反応を聞いてみたい人に、ライフレビューブックができたことをどう思っているのか、まずは筆者が尋ねてAに報告すること、その時の反応を見てそれから先のことは改めて考えるということを確認した。

(2) ライフレビューブックDVD版作成の経緯

20XX+2年5月にAと確認した内容を受けて、家族、学校、施設への対応をはじめ、DVD版の作成に向けて取り組んだ内容を表3に示す。

このように、ライフレビューブックのDVD化については、実姉夫妻や学校の担任にも報告した上で取組を進め、ナレーションは、毎年夏季休業期間中にゲストティーチャーとしてAの授業を担当しているD特別支援学校の教師Eに依頼した。また、筆者の勤務校の同僚である教師Fに映像や音声全般に関

する編集作業の協力を得て、10月にはDVD版(原版)が完成した。

20XX+2年10月上旬に施設を訪問し、Aに面会してライフレビューブックのDVD版(原版)を視聴してもらい、反応を確認した。テレビに映像が流れている間、画面から目を離さず、特に「家族のこと」や「住んでいた場所の思い出」、「私にとってのテレビ」、「伝えたいこと」等の場面では、しっかりと目を開いて真剣に画面を注視していた。また、「最近益々母に似てきたなあと感じている。」というように姉のことを伝える場面での笑顔や、家族で川に行って初めて浮き袋を使って泳いだという「外出した時の思い出」の場面で見せた満面の笑み、「施設に入るまで」の場面で見せた懐かしそうでもあり、寂しげでもある表情等が特徴的であった。ライフレビューブックがDVD化されたことには、「テレビで見ると、いろいろと思い出される」、「テレビの方

がわかりやすく、映像を見ながら思い出される」、「ナレーションもはっきりわかった」、「ナレーションもBGMもあった方がよい」等の感想が挙げられた。さらに、「自分のことをもっと知ってほしい」、「ライフレビューブックを見た人の反応が知りたい」というAの思いに応えるために、ライフレビューブックのDVD版を関係者に見てもらおう場を設定することを提案すると肯定的な反応を示し、「ライフレビューブックDVD版完成上映会」の実施に向けた取組が新たに展開された。

(3) 「ライフレビューブックDVD版完成上映会」の実施

「ライフレビューブックDVD版完成上映会」(以下、「上映会」)の実施に当たっては、実姉宅を訪問し、実姉夫妻にライフレビューブックDVD版(原版)を視聴してもらった上で、「上映会」の相談・協力要請を行い、同意を得た。その後、施設を訪問してAと面会し、実姉夫妻に「上映会」開催の了解を得たことを報告し、具体的に準備を進めていくことを確認した。さらに、施設にも同様に趣旨説明を行い、協力を得ることを確認した。A本人、実姉夫妻、施設の都合を調整した結果、11月下旬に施設内会議室で実施することが決定した。

① 「上映会」の計画・準備段階

11月上旬より「上映会」への参加要請を施設、学校、地域の障害者相談支援事業所に行った。それぞれ今回の趣旨をていねいに説明し、実際にAとの接点がある人達に呼びかけてもらった結果、A本人と協力者である筆者、実姉夫妻の4名と、施設関係者3名、学校関係者6名、障害者相談支援事業所関係者3名を加えた計16名の出席が決定した。施設関係者の一人は同施設で学齢超過者としての先輩でもあるCであり、学校関係者には、訪問教育担当者3名をはじめ、DVDのナレーションや編集作業の協力者である教師Eや教師Fも含まれていた。

「上映会」の参加予定者には、Aと筆者との連名による招待状を手渡すとともに、上映会参加に当たり質問紙法による事前調査への協力を要請した。

② 「上映会」当日の取組

「上映会」は、20XX+2年11月下旬の午後から約2時間半、施設内の会議室で開催された。事前に施設や学校関係者の協力を得ながら、会場等の準備が行なわれた。出席者が「上映会」開始前の時間を有効に活用してもらえるように、壁面にはこれまでAが作成した「新聞」の各号を掲示した。また、会

場内には花が飾られるとともに、オルゴール曲のBGMを流すことにより、参加者の上映前の緊張感が和らげられるよう配慮した。さらに、「上映会」にはお茶を飲みながらリラックスして参加してもらえるように各自の座席にはテーブルも用意された。なお、「上映会」後にはお互いの顔を見ながら感想等が出し合えるように、座席のレイアウトは、会の次第に沿って変更できるようにした。

当日は、受付で、配布資料として会次第(表4)、出席者名簿、作成者であるAの挨拶文、「上映会」後の質問紙法による調査用紙が手渡された。なお、会の進行は、「上映会」の企画・調整を担当した筆者が、次第に沿って行った。

表4 DVD完成上映会次第

| 会 次 第 | |
|-------|------------|
| 1 | 開会のことば |
| 2 | DVD作成者挨拶 |
| 3 | 完成上映会までの経緯 |
| 4 | 協力者代表挨拶 |
| 5 | 出席者紹介 |
| 6 | DVD上映 |
| 7 | 出席者感想 |
| 8 | 閉会のことば |

「DVD作成者の挨拶」は、訪問教育の授業の中でA自身が現在の担任と一緒に考え、当日は自分の言葉で思いを伝えた。挨拶の内容を表5に示す。

表5 ライフレビューブックDVD版作成者の挨拶

| 「思い出と今」DVD完成披露会 | |
|---|--|
| あいさつ | |
| 今日は、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。 | |
| 私が生きてきた歴史を後藤先生と本にしました。今度、それをDVDにしました。自分がいつでも見られるように作ってもらいました。 | |
| 障害者として生まれてきた私の思いを少しわかってほしいと思います。 | |
| このあと、DVDを見ていただき、感想を教えてください。よろしく願います。 | |
| A | |

「完成上映会までの経緯」については筆者が行い、「協力者代表の挨拶」はAの実姉の夫である義兄に依頼した。さらに、出席者の顔がAによくわかるように、一人ずつ順番に立っていただき、ていねいに名前と所属の紹介を行った。その後、約50分間の

DVDを大型スクリーンに上映した。長時間にも関わらず、出席者全員が最後まで映像に注目し、場面に応じて時折笑い声やすすり泣く音が聞こえたり、ナレーションに合わせるようにうなずきながら視聴したりされる様子が窺えた。今回の完成版DVDの前に、修正前のDVD版(原版)で事前に内容の確認を済ませていたAや実姉夫妻も最後まで熱心に視聴されていた。

上映終了後は、しばらく休憩の時間をとり、その間にお互いの顔が見えやすいように会場のレイアウトを変更した。また、休憩時間にはお茶とお菓子が準備され、参加者間で自由に歓談されたり、「上映会」後の質問紙法による調査用紙に記載されたり、会場内に掲示したAが発行を続けている「新聞」に目を通されたりして、各自の過ごし方をされていた。A自身もお茶とお菓子をいただいたり、多くの方から声をかけられたりして、終始笑顔であった。

休憩後には、出席者全員の感想が出された。自分の立場や体験と重ね合わせながら、Aのことや今回の「上映会」のことをはじめ、いろいろと考えたり思ったりしたことについて、一人ずつ順番に語られた。特に、多くの出席者から今回の「上映会」に参加して良かったという感想が出され、Aの実姉からは、それぞれの立場でのAとのかかわりや今回の「上映会」の開催が実現したことへの感謝の気持ちが伝えられた。最後に、A自身が挨拶を行い、「高等部でも勉強を頑張りたい」、「まずは高等部に合格できるように受験を頑張る」という未来志向の意思表示がなされ、「上映会」の全ての日程が終了した。

なお、「上映会」後の質問紙法による調査については、記載済みの分は当日回収し、当日中に記載できなかった分は後日回収を行った。

③ 「上映会」参加者への事前調査

a. 調査目的

「上映会」出席者に対して、「上映会」実施前に質問紙法による調査を実施し、60歳を過ぎて特別支援学校中学部に入学した学齢超過者Aにより作成されたライフレビューブックのDVD化への認知度や期待感を把握する。

b. 調査対象

A及び筆者を除く「上映会」出席者14名中、12名(施設関係者3名、障害者相談支援事業所関係者3名、学校関係者6名)からの回答が得られた。(回収率85.7%)

c. 調査方法

質問紙法による調査用紙を「上映会」当日の招待状に同封し、「上映会」の数日前までに対象者各自に直接手渡して回答への協力を依頼した。記載済みの回答用紙は、「上映会」当日の受付にて回収した。

d. 調査内容

調査項目の概要を表6に示す。

表6 「上映会」参加者への事前調査項目の概要

| |
|--------------------------------|
| 【調査1】回答者の概要 |
| ○年齢 |
| ○Aとの関係(立場) |
| ○Aと関わり始めてからの年月 |
| ○Aと直接関わる機会 |
| 【調査2】Aのライフレビューブック作成やDVD化に対する把握 |
| ○ライフレビューブックの作成について |
| ○ライフレビューブックDVD版の作成について |
| 【調査3】「上映会」参加に当たっての意識 |
| ○ライフレビューブックDVD版のことを最初に聞いた時の思い |
| ○今回の「上映会」に対する期待感や思い |

調査1、調査2は、2件法、3件法、多肢選択法を組み合わせ実施し、調査3では自由記述法による回答を求めた。

e. 分析手続き

調査1、調査2では、各項目の回答数を比較分析した。調査3では、記述分析法をもとに回答内容を分類・整理し、評価・分析を行った。

④ 「上映会」参加者への事後調査

a. 調査目的

「上映会」出席者に対して、「上映会」後に質問紙法による調査を実施し、60歳を過ぎて特別支援学校中学部に入学した学齢超過者Aにより作成されたライフレビューブックのDVD化に対する意見・感想等を集約し、効果を明らかにする。

b. 調査対象

A及び筆者を除く「上映会」出席者14名中、14名全員(家族2名、施設関係者3名、障害者相談支援事業所関係者3名、学校関係者6名)からの回答が得られた。(回収率100%)

c. 調査方法

「上映会」当日の受付にて、「上映会」後の質問紙法による調査用紙を対象者各自に直接手渡し、回答への協力を依頼した。「上映会」後の質問紙法による調査については、記載済みの分は当日回収し、当日中に記載できなかった分は後日回収を行った。

d. 調査内容

調査項目の概要を表7に示す。

表7 「上映会」参加者への事後調査項目の概要

| |
|---|
| <p>【調査1】回答者の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年齢 ○Aとの関係（立場） |
| <p>【調査2】ライフレビューブックDVD版に対する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ○実際に視聴してどう思ったか ○Aに対するライフレビューブックDVD版の取組の意義 ○支援者に対するライフレビューブックDVD版の取組の意義 |
| <p>【調査3】「上映会」参加後の意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ○Aに対する新たな気付きや見方の変化 ○回答者自身に対する振り返り ○その他、「上映会」に参加しての意見や感想等 |

調査1では多肢選択法を、調査2では評定法を組み合わせて実施し、調査3では、自由記述法による回答を求めた。

調査1、調査2では、各項目の回答数を比較分析した。調査3では、記述分析法をもとに回答内容を分類・整理し、評価・分析を行った。

⑤ 「上映会」終了後のAへの聞き取り

Aに対しては、「上映会」参加者への調査結果の集約後の20XX+2年12月中旬に、筆者が施設を訪問して面談を実施した。「上映会」当日の感想を含め、ライフレビューブックDVD化に関するインタビューにより聞き取った内容等を分析し、効果の検証を行った。

3. 結果

1) 「上映会」参加者への事前調査の結果

(1) 【調査1】回答者の概要

回答者の概要を、図2（①～④）に示す。

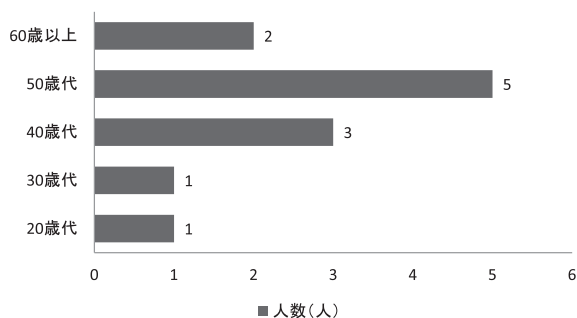


図2 - ① 回答者の年齢

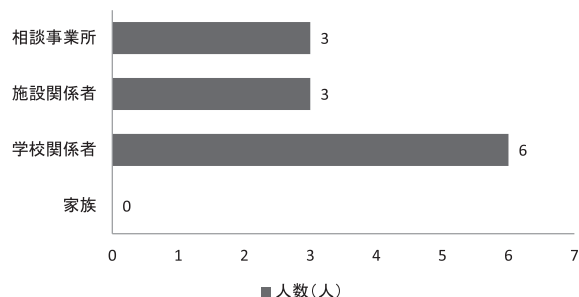


図2 - ② Aとの関係（立場）

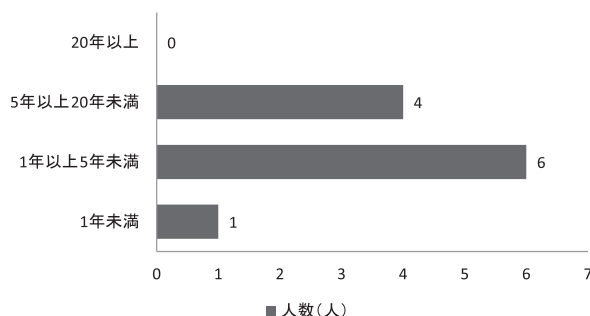


図2 - ③ Aと関わり始めてからの年月

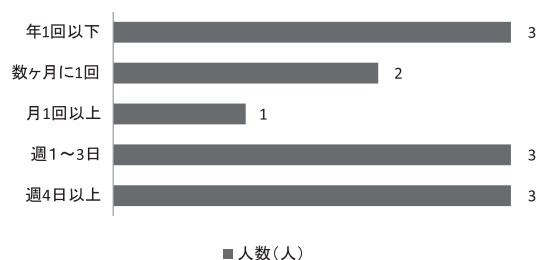


図2 - ④ Aと関わる機会

(2) 【調査2】Aのライフレビューブック作成やDVD化に対する把握

調査結果を、図2（⑤）、⑥）に示す。

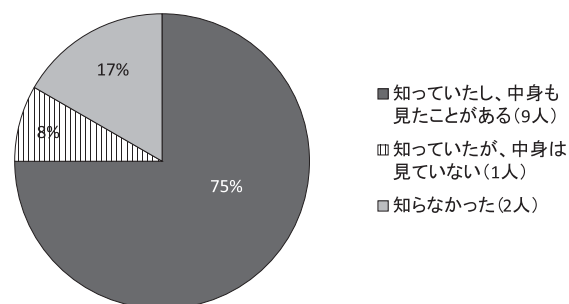


図2 - ⑤ ライフレビューブックの作成についての把握

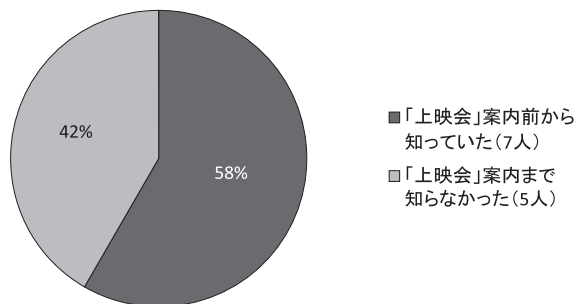


図2 - ⑥ ライフレビューブック DVD版作成についての把握

昨年度Aがライフレビューブックを作成したことを知っていたのは10名で、そのうち中身も見たことがあったのは9名であった。知らなかったという回答も2名に見られた。一方、今年度AがライフレビューブックのDVD版を作成したことを知っていたのは7名、「上映会」の案内を受けて初めて知ったのは5名であり、ライフレビューブックのDVD化の取組については、ライフレビューブック作成の取組に比べると十分には認知されていないことが示された。

(3) 【調査3】「上映会」参加に当たっての意識

回答者による自由記述の一覧を表8 (①, ②) に示す。

① ライレビューブック DVD版のことを最初に聞いた時の思い

「上映会」への参加者が、AのライフレビューブックDVD版の取組を最初に聞いた時の思いに関する回答内容を分析した結果、本と比較してDVDの効果強調する意見、ライフレビューブックを作成すること自体が、本人や周囲にとって意味があるとする意見、今回の取組に触れたことで自分の人生に役立てたいという感想、DVDの制作に協力した参加者の思いに分類(表8 - ①)された。

② 「上映会」に対する期待感や思い

「上映会」に対する期待感や思いに関する回答内容を分析した結果、本の内容がDVDとして上映されることやみんなと一緒に視聴することへ期待、本人や家族の思いを知り、参加者で共有できることへの期待、様々な立場の人に対する効果への期待、A自身に対する思いに分類(表8 - ②)され、参加者各自が具体的な意見や思いを抱いて参加していることも明らかとなった。

表8 - ① ライレビューブック DVD版のことを最初に聞いた時の思い

| |
|--|
| ○本と比較してのDVDの効果への期待 |
| a 本はじっくりといろいろなことを考えたり思いを馳せながら読んだり見たりできるところが良いと思います。ただ、多数で一度に見ることはできません。その点、DVDは、多数の方が同時に観ることができます。 |
| b ライレビューブックは制作秘話など、いろいろな話を解説していただきながら読むことができました。DVD版になると、誰でも私のような体験ができて良いなあと思いました。 |
| c DVDは、障害をもたれ、自分で本を開くことが難しい方にも有効だと思います。 |
| d DVDにすることで、さらに多くの人に見てもらえると思うので良いと思う。ご本人も、本を見ることが難しい人にも見る機会が増えて良いと思う。 |
| ○ライフレビューブックの作成自体の本人や周囲にとっての意味 |
| e すごいなあと思いました。Aさんの足跡がまた一つ増えましたね。 |
| f 学校に行っていない人は履歴書がないというか、書けない状況の人が多いです。ライフレビューブックは、人生の記録になって大変良いと思います。 |
| g 本人の生い立ちを客観的に振り返ることができる。形として残る素敵な取組だと思います。 |
| h 自分史を知るのは大事なことです。伝えたいこともあると思う。ご本人や家族の気持ちを整理しながら実現されたのだと思った。 |
| i Aさんのことをもっとよく知る一つとして私自身も興味があり、大切なことだと感じています。 |
| ○自分の人生にも役立てたい思い |
| j すてきだなと思いました。私もこのようなものをいずれ作ってみたいです。 |
| k 長年生きてくると、同じ一日の繰り返しになりがちで…。ここで一度人生を振り返り、今後の自分の生き方に活かさなければと思います。 |
| ○DVDの制作に協力した参加者の思い |
| l ナレーションを依頼していただき、光栄に思いました。もっと上手な方、国語科の教員として認めてくださっているのだとうれしく感じて、良い作品(DVD)になるよう努めました。 |
| m Aさんに満足してもらえるDVDにしようと頑張って作りました。 |

表 8 - ② 「上映会」に対する期待感や思い

○本の内容が DVD として上映されることやみんなと一緒に視聴することへ期待

- a 本は見せていただいたので、それがどのような DVD になっているか楽しみです。
- b DVD になるとどうなるのだろうとワクワクしています。
- c DVD は、みんなで一緒に観ることができるのが良いと思う。
- d 関係する方が一堂に上映会に参加することで、その後の感想を出し合う中で A さんへの支援の幅が広がれば良いと思います。

○本人や家族の思いを知り、参加者で共有できることへの期待

- e どんな方が集まるのか、集まった人達とどんな話ができるのか楽しみです。
- f A さんに会うのは初めてなので実際に会えることを楽しみにしています。
- g なかなか聞くことができないご本人や家族の思いを聞かせてもらいたい。
- h 本人やご家族の「声」として、いろいろな思いを聞けることを期待しています。
- i 本人さんの小さい頃の思い（どんな思いで生活されてきたのか）を聞きたいです。
- j ご本人が、何を考え、これまでどうやって生きてこられたか、大変興味があります。

○様々な立場の人に対する効果への期待

- k 今回の取組は、A さん本人にとっても良いことですね。
- l 参加された方は、自分の人生も振り返られることでしょうね。
- m A さんの半生を知り、「勉強したい」という思いが伝わってきました。できることなら本校生徒にも DVD を見せていただきたい。国語の中でも教材化できないかと考えています。

○A 自身に対する思い

- n A さんは、重い障害をお持ちでありながら、いつも笑顔でまわりを柔らかな気持ちにさせてくれる不思議な力をお持ちの方です。
- o A さんと出会えたことをありがたく思っています。

2) 「上映会」参加者への事後調査の結果

(1) 【調査 1】回答者の概要

「上映会」後の調査には、「上映会」前の調査の回答者に家族 2 名が新たに加わり、対象者 14 名全員により回答がなされた。

(2) 【調査 2】ライフレビューブック DVD 版に対する評価

上映されたライフレビューブック DVD 版を視聴してどう思ったかについて 5 段階評価で尋ねる質問には、無回答 1 を除く 13 名が「非常に良かった」と回答されている。ライフレビューブック DVD 版の取組の意義を 5 段階評価で尋ねる質問では、A に対しては、回答された 13 名全員が「非常に意義があった」、支援する側にとっても、回答された 12 名全員が「非常に意義があった」という回答であった。いずれもライフレビューブック DVD 版の取組に最大の評価をされていることが明らかとなった。

(3) 【調査 3】「上映会」参加後の意識

回答者による自由記述の一覧を表 9 (①～③) に示す。

①「上映会」後の A に対する新たな気付きや見方の変化

A に対する新たな気付きや見方の変化に関する回答を分析した結果、第 1 に学校や教育、学ぶことの大切さを実感する意見や感想、第 2 に A の思いの強

さや諦めない気持ちに引きつけられる意見や感想、第 3 に A 自身の人生に触れたことによる理解の深まり、第 4 に実際にかかわりあう中でお互いに影響を与え合い、もっと知りたいという気持ちへの発展、第 5 に A 自身に対する印象の変化や思いという 5 つのカテゴリーにより分類 (表 9 - ①) された。

②回答者自身に対する振り返り

回答者自身の振り返りにより自分自身のことで思ったり考えたりしたことに対する回答では、第 1 に、教師、相談支援業務、小・中学生への読み聞かせというそれぞれの立場から学校や教育、学ぶことの大切さを考える機会となった感想や意見が挙げられた。第 2 に、これまでの自分の人生を振り返り、今後の人生との向き合い方や生き方につながるような感想や意見が挙げられた。さらに、A の家族を通じて自分の家族のことを想起することにつながった感想や意見が挙げられるとともに、家族、障害当事者、日常的な支援者特有の思いもそれぞれの立場で出され、合わせて 4 つのカテゴリーにより分類 (表 9 - ②) された。

③その他の意見や感想

その他の意見や感想では、表 9 - ③に示す 6 つのカテゴリーで分類された。

表9 - ① 「上映会」後のAに対する新たな気づきや見方の変化

| |
|---|
| <p>○<u>学校や教育，学ぶことの大切さを実感する意見や感想</u></p> <p>a 学校に行きたい，勉強をしたいという思いが，とても印象的でした。</p> <p>b 教育の大切さと大事さをあらためて感じました。</p> <p>c 学校に行きたいという思いを50年あまり経って実現できた思いをしっかりと聴かせてもらった。</p> <p>d テレビが中心の情報源だったということですが，多くのことをしっかりと学んでおられると思った。</p> <p>○<u>Aの思いの強さや諦めない気持ちに引きつけられる意見や感想</u></p> <p>e いつもニコニコされている印象が強かったAさんの内面に改めて触れた気がした。</p> <p>f 日常的に接しているのに特にとというのはありませんが，やっぱりすごいな（意欲，思いの強さ）と思った。</p> <p>g 家族それぞれにしっかりとした思いを持っておられるし，心の強い（前向きな）方だと思う。</p> <p>h はっきりと勉強したいと言われるので，支援する人たちも応えたい思いが強くなるのだと思いました。</p> <p>○<u>A自身の人生に触れたことによる理解の深まり</u></p> <p>i Aさんと関わる前の歴史が，一部ではあるがよくわかりました。</p> <p>j たくさんの思いをかかえながら，生活されてきたことが良くわかりました。</p> <p>k 家族の様子，表情をよく観て考え，覚えてあったこと，施設入所することを決めた後，「ちよっぴり寂しかったけど，あきらめた」ことなど，聴こうとしなければ聴けないうたくさんの思いを聴かせてもらった。</p> <p>l Aさんは，あたたかい家族に囲まれていたことを改めて感じました。</p> <p>○<u>実際にかかわりあう中での影響の与え合い，もっと知りたい気持ちへの発展</u></p> <p>m DVDを作りながらも感じていたが，笑顔のとても素敵な方だと思った。</p> <p>n いい人達とめぐりあい，本人にとって生きる励みになっていると思います。</p> <p>o Aさんの人生を知り，Aさんをもっと知りたくなりました。</p> <p>p もっともっとAさんのお話が聞きたいなと思いました。</p> <p>○<u>A自身に対する印象の変化や思い</u></p> <p>q 小さい頃のAさんかわいいですね。できれば，青年期，壮年期の写真も見たいと思いました。</p> <p>r すごい記憶力で数字に強い（〇年に〇〇した）のは，将棋や囲碁が活かされているのではないのでしょうか。</p> <p>s 義兄さんが「A君はかわった」と言われてありました。元々前向きな方だと思っていたので意外でした。</p> <p>t まだまだ語りつくせないこともたくさんあるかと思っています。高校入学後の取組も楽しみにしています。</p> |
|---|

表9 - ② 回答者自身に対する振り返り

| |
|---|
| <p>○<u>学校や教育，学ぶことの大切さを考える機会となった感想や意見</u></p> <p>a 学校に行けることはこれまで当たり前のように考えていたところがあったが，Aさんのことを知り，行きたくても行けなかった人たちがたくさんいることを知った。</p> <p>b 過年度生の生徒，訪問教育のことへ関心を向けるきっかけとなりました。</p> <p>c 自分が現在担当している生徒のことをずっと思い浮かべながらDVDを観ていた。</p> <p>d 学びたいと思っている方々にこれからも支援していこうと思いました。</p> <p>e 相談支援事業で不登校をはじめいろいろなケースに関わるが，学びたいと思った時（いつの年齢であっても，教育期間が終わっていても）に学べる場，学べる方法があればいいなと思います。</p> <p>f 「学びたい」という本人の希望を支援するにはどうすべきかを今後の自分の課題としたいと思います。</p> <p>g 「ぼくたちは，なぜ学校に行くのか」の本を中学生に読み聞かせをすると，「なぜ」ということを考えてくれるきっかけになることを実感します。今回のことも何かの形で伝えたいと思いました。</p> <p>○<u>自分の人生を振り返り，今後の生き方につながる感想や意見</u></p> <p>h Aさんのライフレビューブックを見て，自分も子どもの頃の自分を改めて思い出そうとしても，なかなか思い出せないと感じた。</p> <p>i Aさんのように常に前向きに生きていこうと思う。私も頑張らねばと思いました。</p> <p>j Aさんの人生をたどることで自分の生き方を考えさせられる機会となりました。</p> <p>k これまで70歳以上の自分を思い描けずにいましたが，Aさんのこれからの輝かしい人生を思うと，自分は何と傲慢だろうと恥ずかしくなります。</p> <p>l 私自身振り返ることなく，ここまで来ました。そろそろ定年も近く，人生のまとめに入る時期となりました。私も過去を忘れてしまう前に振り返り，最期ステージに備えようかと思いました。</p> <p>m 今だから語れる本音は誰にでもあります。時間がある時，法要や祝い事で皆が集まった時，昔を振り返る時間は，とても大切にしたいとずっと思っていました。</p> <p>○<u>Aの家族を通じて自分の家族を想起することにつながった感想や意見</u></p> <p>n 家族の大切さ，思いやりを感じる機会となりました。</p> <p>o 家族のことをこんな風に振り返ることができるAさんは幸せだなと思いました。</p> <p>p 自分が生まれた年代の写真が出る度に懐かしく，当時は私の母も同じような髪形していたことや，使用していた家やテレビのことも思い出しました。</p> <p>○<u>家族，障害当事者，日常的な支援者特有の思い</u></p> <p>q これからも元気で頑張ってくれればと思います。</p> <p>r 同じ立場で親のことやきょうだいのことなど，私自身もいろいろ思いがわいてきた。私もライフレビューブックを作りたいと思った。</p> <p>s コミュニケーションの話題のきっかけに今後なると思います。</p> |
|---|

表9 - ③ その他の意見や感想

○「上映会」の開催や参加に対する感謝の気持ち

- a 本当にいろいろお世話をかけ、ありがとうございます。
- b 本日、参加させてもらい、ありがとうございました。
- c このような機会を与えてくださり、Aさんと関わりをもつことができ、とても嬉しく思っています。
- d 素敵な方と時間を共有することができて感謝しています。
- e 大変心あたたまる時間になりました。来ることができて良かったです。

○取組の経過や内容を評価し、今後の活動にも期待する意見

- f DVD化したこともすごいけど、こんな会を催す企画に脱帽です。
- g このような機会が、いろいろな場所でもっていただけたらと思いました。

○学校や教育、学ぶことに対する意見・感想

- h Aさんと出会えたことで、いろいろなことを知り勉強することができたと思う。これからも、この出会いを大切にしたい。
- i Aさんが50年「学びたい」という気持ちを持ち続けられた、諦めなかった気持ちに敬服いたします。
- j 子ども達にも「勉強したい」という思いを伝えたいです。
- k 特に、「50年待つことになったが」という文章は胸を打ちます。
- l 学ぶことの素晴らしさ、人は一人では生きられないと改めて感じた。

○障害当事者の立場での思い

- m 学校に行っていない人がまだたくさんおられる中で、私自身は教育を受けられて良かった。高校まで行って良かったと思う。
- n 身体障害を有する家族がいるが、高校は卒業したが、地域の学校には行けず、小学校は出ていない。Aさんの話をすると、「私も小学校に入り直したい」と言っていた。
- o 勉強したいけど出来なかった方もまだ沢山いらっしゃるだろうし、Aさんの話を聞いて勉強したいと思われる方も多いでしょう。

○支援者としての立場での思い

- p 他の利用者のことももっと深く理解する努力が必要です。今回の取組に感謝、感謝です。
- q 教師は、月日を重ねるごとに「私目線」が強くなりがちです。Aさんをはじめ、いろいろな方のお話を聞くことができ、「生徒の目線で、生徒の立場になって大切に」ということを再度心に強く刻みました。
- r 人が何かをしたいという強い思いは周りをごんごんに動かす力があるのだということを感じました。
- s 子ども達の好き、得意、やりたい思いを引き出し伸ばすことが教師の使命と感じました。

○その他の意見・感想

- t テレビのない時代にテレビを購入され、小さい頃の写真も残っていることから、Aさんの御家族が、Aさんをとても大切にされていたのだと感じました。
- w 義兄さんが来場者を家族のように感じるとおっしゃったことに大変うれしく思いました。
- u AさんのDVDを見ながら、久しぶりに昭和の時代を感じることができました。
- v Aさん、Cさんに、これからも先頭に立って頑張ってもらいたいです。

3) 「上映会」終了後のAとの面談による分析

はじめに「上映会」を終えて集約された参加者全員の感想等を伝えたところ、「いろんな人にDVDを見てもらい、いろんな感想が聞けたことが良かった。」という感想が出された。「感想の中で特に印象に残っていること」を尋ねると、「(同じ学齢超過者である) Cさんが感想を書いてくれたことが嬉しかった」ということであった。また、実姉夫妻に対する思いを尋ねると、「ありがとうという気持ちでいる」、学校の教師に対しては、「(上映会当日に) いろんなことを言ってくれて嬉しかった。」「感想を書いてくれたことも嬉しかった。」という思いが伝えられた。はじめてライフレビューブックを作成した時には「まわりの反応がない」という思いが強く、不満げな様子が見られたが、今回のDVD版による「上映会」には「満足している」という思いが語られた。「上映会」参加者への事後調査内容の中

で、上映されたライフレビューブックDVD版を視聴してどう思ったかについて5段階評価で尋ねる質問と、DVD版の取組の意義をAに対してと支援する側に対して、それぞれ5段階評価で尋ねる質問をAに対してもしてみたところ、非常に良かった、非常に意義があったという回答がなされ、A自身もDVD版の取組には最大の評価を示した。

4. 考 察

本研究は、60歳を過ぎて特別支援学校中学部に入学した重度の身体障害を有する学齢超過者Aに対して、訪問教育で取り組んだ回想法をもとに作成されたライフレビューブックをDVD化することにより、当事者自身及び家族・支援者に対する効果を明らかにすることを目的とした。実施に当たっては、ライフレビューブックの内容をテレビ画面で視聴できる

ように各ページを映像化するとともに、ナレーションを加えてDVDを作成し、当事者と家族、支援者が一堂に会して鑑賞できる「上映会」を開催した。DVD視聴後の当事者の感想とともに、家族、支援者に実施した質問紙への回答結果をもとに評価・分析を行った結果、ライフレビューブックをDVD化することは、障害を有する当事者にとっても、支援する側にとっても意義があることが明らかになった。これらの結果をもとに、重度の身体障害を有する高齢者の学齢超過者に作成したライフレビューブックをDVD化する効果について、3つの視点から考察する。

1) 当事者自身に対する効果

今回のライフレビューブックDVD化の取組は、元々訪問教育授業における回想法や回想法で振り返った内容を整理したライフレビューブックの取組が根底に有り、継続的取組における発展型として捉える視点が重要である。回想法の効果には大別して個人・個人内面の効果と社会的・対人関係的・対外的世界への効果の2者があるとされている。Aの場合、これまでの回想法やライフレビューブック作成の取組を通して、自分自身の人生について振り返り、①過去からの問題の解決と再組織化および再統合を図ること、②アイデンティティの形成に役立てること、③過去の自分を認め、今の状況に向かい、未来を志向すること、④自尊感情を高めることなど、個人・個人内面に対する効果は、ある程度認められていた。しかし、社会的・対人関係的・対外的世界に関する効果は、個人回想法による振り返りを基本としたことや作成したライフレビューブックの配布先を限定したことにより、これまでの回想法やライフレビューブックの取組からは十分に効果が見られていたとは言い難い。さらに、「多くの人に自分のことをもっと知ってもらいたい」という気持ちを以前から抱いていたAにとって、ライフレビューブックの完成後も、しばらく周囲の反応がなかったことに対する不信感とも関連していたことが考えられる。

今回のライフレビューブックDVD版の「上映会」では、A自身が伝えたい内容を視覚化することにより、その場に参加した多くの人たちで情報を共有し、共通認識を図ることが可能となった。しかも、参加者自体がAの家族をはじめ、施設の利用者や職員、学校関係者や障害者相談支援事業所関係者など、多職種多領域であり、様々な立場による意見交換が

実現したことで、回想法の効果としても挙げられている社会的・対人関係的・対外的世界への効果を、より高めることも期待された。実際に「上映会」に参加した人たちへの意識調査では、ライフレビューブックDVD版の取組はA自身にとっても「非常に意義があった」という評価を受けており、自由記述の内容からもAに対する新たな気付きや見方の変化等が、それぞれの立場で詳しく述べられている。また、「上映会」当日は、DVDの視聴後に各自の感想を述べる時間を設定したことで、A自身が直接参加者の思いや考えを聞くことができ、上映されたライフレビューブックDVD版の内容についても参加者の反応を知る機会となった。このことは、「上映会」終了後に実施したAとの面談による聞き取りで、「いろんな感想が聞けたことが良かった。」というAの発言とも一致しており、ライフレビューブックDVD版に対する質問項目にA自身が回答した際の高い評価にもつながったものと思われる。以上のことから、ライフレビューブックのDVD化に取り組むことにより、A自身の社会的・対人関係的・対外的世界への効果を高めることができたと言えるだろう。

また、ライフレビューブックのDVD化の取組を近年高齢者に注目されている自分史作成と比較してみる。自分史作成では、自分自身が作成したい内容をイメージした上で、必要に応じて他者からのインタビューを受けたり協力を得たりして自分の人生を振り返り、自分自身が主体的に作成に関わって完成を目指す取組である。自分史作成を取り入れた回想法の効果の研究(2007, 井山ら)もあるが、何よりも高齢者の生きがいや完成した時の満足感につながることが示唆されている。一方、重度の身体障害を有するAにとっては、ライフレビューブックとして1冊の小冊子にまとめるまでの取組の過程では、自分史作りとも共通した効果が見られたものの、ライフレビューブックの完成後は自分の見たい時にいつでも活用できるわけではなかった。しかし、ライフレビューブックのDVD化の取組により、新たにA自身の主体的活動や達成感を促す効果が見られるようになった。DVD化してテレビ画面で観ることができるようになり、さらにナレーションを加えたことで、A自身が普段のテレビを観るように視聴することができるようになった。そのことにより、誰かにライフレビューブックの記載内容を読んでもらっていた時に比べて、内容も理解しやすくなり周囲に気

を使うこともなく、リラックスして視聴することができるようになった。このように、ライフレビューブックのDVD化の取組は、自分の見たいときに繰り返し手にとって眺めることのできる自分史と同様に、Aが小さい頃から慣れ親しんだテレビを活用することにより、これからもいつでも観たいときに繰り返し観ることができようになった。今後もDVDを視聴する度に、視覚、聴覚をはじめとする五感を刺激し、懐かしい思いを深め、心の中を整理する効果が見られるだろう。

2) 家族への効果及び家族との関係における効果

回想法の実施やライフレビューブックの作成は、家族への説明と配慮をていねいに行うことで、家族自身や家族との関係作りにおいても効果がみられるようになると言われている。実姉夫妻と筆者との関わりを具体的に振り返りながら考察する。Aの場合も、回想法の実施からライフレビューブックの作成、さらにはライフレビューブックのDVD版の作成や「上映会」の開催に至るまで、常に当事者であるAの意向を確認した上で、唯一の家族である実姉に連絡を取り、説明や相談をしながら進めることを心がけた。そのことにより、活動の趣旨を理解していただき、様々な面での協力を得ることができ、スムーズな取組へとつながった。Q&Aでわかる回想法ハンドブック(2011)では、認知症高齢者にグループ回想法を実施することによる家族への効果について、当事者の人生と想いを共有する効果や家族が高齢者の残存能力に気付く効果が挙げられている。Aの姉の場合も、特にライフレビューブックの作成を通して、姉弟の関係性や家族としての思い出を共有でき、あらためてお互いが歩んできた人生を振り返ることができたことが第1の成果としてあげられる。また、ライフレビューブックの作成過程からライフレビューブックのDVD版の完成に至るまで、筆者は何度も実姉夫妻に話を伺う中で、最初の頃のAへの評価は「弟は頑固で思い込みが強い」等のマイナス面での発言が目立っていたものの、ライフレビューブックの取組が進む中で「このように思っていたのか」、「このようなことも覚えていたのか」等のプラス面での評価が増えるなど、Aに対する実姉の見方や捉え方が徐々に変化していったことも成果の一つとして挙げられる。

また、Aにより作成されたライフレビューブックやライフレビューブックDVD版を視聴しながら内

容を確認される中で、実姉自身も当時の状況を振り返り、Aの思いやA自身の捉え方については尊重された上で、当時の自分自身の思いや自分の捉え方等も話して下さるようになってきた。あくまで、Aのライフレビューブックの作成やライフレビューブックのDVD化に向けた取組の一環ではあったが、実姉から話を伺う中で何度も「私には私の人生がある」と語られたことが印象的であった。回想法の取組の一つに家族回想法もあるが、Aの実姉夫妻と話をしている時には、筆者自身が時空を超えて当時の実姉との時間を共有しているような錯覚を感じることもあった。まさに、同じ時代に同じ場所で過ごしていても、家族一人一人にはそれぞれの思いや捉え方があり、人生があるということあらためて認識させられた。

ライフレビューブックDVD版の「上映会」には、Aの実姉夫妻も参加された。当日は、DVDの上映後に、それぞれの参加者からの感想が出され、Aと周囲の人達との関係性を実姉夫妻が把握することにもつながった。このことにより、取組自体の意義を認識され、実姉夫妻からは参加者への感謝の思いが伝えられた。一方、「上映会」の取組を終えて後日筆者が施設を訪問して行ったAに対する面談では、実姉夫妻が「上映会」に参加されたことに対する感謝の気持ちがA自身から示された。

このように、ライフレビューブックのDVD化の取組はAの人生を視覚化し、共有することにより、家族自身にとっても、当事者と家族との関係においても、参加者と家族との関係においても効果的な取組になったと言える。

3) 支援者への効果及び支援者との関係における効果

「ライフレビューブックDVD版完成上映会」参加者への事前・事後の調査結果から考察する。

今回の「上映会」への参加者の多くは、職種や関わり方に違いはあるものの、A自身のことやAによるライフレビューブック作成の取組について、ある程度情報を得ている人たちであった。そのため、「上映会」に向けた事前調査の段階から、ライフレビューブックのDVD化や「上映会」に対する大きな期待が示された。一方、「上映会」後に行ったライフレビューブックDVD版に関する調査結果によると、回答者の属性に関わらず、内容面での評価が高く、支援する側にとっての意義についても最大の評価が

なされるなど、ライフレビューブックのDVD化の取組は、支援者に対する活用面での効果が示唆された。

また、DVD視聴後の参加者の意識を自由記述により尋ねた3つの質問に対する回答では、主に、「学校や教育、学ぶことの大切さ」、「A自身に対する新たな気付きや、もっと知りたいと思う気持ち」、「回答者自身の人生の振り返り」、「家族の想起、家族との関係性」、「支援者としての立場での思い」等が具体的に述べられている。

後藤（2014）は、これまでかかわった3名の学齢超過者との訪問教育を通して、①人は年齢に関係なく、常に「学びたい」という思いがある、②教育は、年齢に関係なく、人を成長させる力がある、③人はかかわりあうことで、影響を与え合い、お互いの認識も深まるという、3つの視点から教育的意義を整理している。今回の調査における「学校や教育、学ぶことの大切さ」に関する回答でも、学齢超過者として50年間、「学校に行きたい」という思いを持ち続けたAに対しては、共通する視点で捉える意見が多く見られた。また、それぞれの立場で関わっている当事者の「学びたい」という思いに対しては、「応えていきたい」、「伝えていきたい」という意思表示がなされるなど、参加者各自の立場で教育的意義について考える姿勢が見られる等の効果があった。

ライフレビューブックの作成では、話し手である作成者と聞き手である協力者は、二人で同じ時間を共有し、1対1の個別の関係におけるコミュニケーションを通して、作成者は自身の生きてきた人生を振り返り、語っていく。回想法やライフセラピーによる効果には援助者への効果もあると言われており、高齢者と聞き手である援助者との語りによる交流は相互作用的な側面が考えられ、高齢者の教育的な内容を含んだ語りは、聞き手に学習効果をもたらすという。

このことを、ライフレビューブックのDVD化による「上映会」に置き換えて考えてみると、DVDの視聴に当たっては、作成者であるAの思いを多くの参加者が一堂に会して共有し、映像とナレーションによる語りを通して、生活史を理解してその人らしさを理解することにつながる。このようにして得られたAのかけがえのない人生に寄り添うことで、「A自身に対する新たな気付きや、もっと知りたいと思う気持ち」、「回答者自身の人生の振り返り」、「家族の想起、家族との関係性」等に関する回答に結び

ついていったと考えられる。

さらに、DVDの視聴後には、参加者全員による感想が語られ、交流が図られた。自由記述により集約された「支援者としての立場での思い」に関する回答には、作成されたDVDの内容面からの意見だけでなく、Aと関わりのある様々な立場の人が一堂に会して今回の上映会が開催されたことや、実際にそれぞれの立場の人からの話を聞くことができたことも反映されたと思われる。一人の支援を行うために、多職種多領域での連携を図り、課題を共有しながら取り組むことは重要な視点である。

このように、ライフレビューブックのDVD化や「上映会」の実施を通して得られた過去と今、未来をつなぐ取組や人と人をつなぐ取組の大切さを、今後は個々の支援者が日常の支援場面においても反映させていく必要があるだろう。

5. まとめ

本研究では、60歳を超える学齢超過者Aに対して、回想法をもとに作成されたライフレビューブックをDVD化し、当事者と家族、支援者が一堂に会して鑑賞できる上映会を開催した。DVD視聴後の家族、支援者に実施した質問紙への回答と当事者の感想の評価・分析結果から、ライフレビューブックのDVD化による効果が明らかとなった。そして、いくつかの課題が残された。

今回、「上映会」実施前後に参加者を対象に行った調査では、標本数も少なく、統計的な処理を行うまでには至らなかった。また、質問紙法による自由記述や当事者への面談においても、分析の視点を明確にもつことや、常に客観性を意識して取り組むことを心がけたものの、あくまで筆者による分析・評価を基本としたため、十分に主観的な解釈が排除されたとは言い難い。

今後は、研究手続きや評価方法をより綿密に行うことにより、より科学的根拠に基づく実践を積み重ねていく必要があるだろう。

〈付記〉

本稿の研究成果の一部は、全国訪問教育研究会第28回全国大会及び日本特殊教育学会第53回大会（2015宮城大会）にて口頭報告したものである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、事例の掲載を許可して

くださったA氏に深く感謝いたします。また、ご協力いただいたA氏のご家族、施設関係者、学校関係者各位に心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 猪狩恵美子 (2008) 特集 特別ニーズと教育・人権をめぐる争点「就学猶予・免除の成人障害者の教育権」, 全国障害者問題研究, 36(1), pp. 41-47.
- 2) 井手ゆり・山下一也・加藤真紀・磯村由美 (2007) 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 第1巻, pp. 31-37.
- 3) Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. W. W. Norton. (仁科弥生 (訳) 1977, 幼児期と社会 I, みすず書房)
- 4) 尾台安子 (2008) 「ライフレビューブック作成による利用者理解の効果」, 松本短期大学紀要, 15, pp. 15-26.
- 5) 黒川由紀子・宮本典子・丸山 香・三橋喜久・黒沢幸子 (2001) 高齢者と子どもの心をつなぐ統合的アプローチ—高齢者施設における子どものボランティア活動の事前教育のあり方に関する研究—, 安田生命社会事業団研究助成論文集, 37, pp. 155-160.
- 6) 黒川由紀子 (1994) 痴呆老人に対する回想法グループ, 老年精神医学雑誌, 5(1), pp. 73-81.
- 7) 黒川由紀子 (2005) 回想法—高齢者の心理療法, 誠信書房.
- 8) 黒川由紀子 (2008) 認知症と回想法第11章「世代間交流としての回想法」, 金剛出版, pp. 132-142.
- 9) 後藤 宏 (2014) 全国訪問教育研究大会第27回全国大会 (南九州) 報告, 分科会報告⑥ (施設内の教育) 「就学猶予・免除を受けていた成人障害者のニーズに配慮した授業の試み—3名の学齢超過者との出会いと訪問教育におけるかわりから—」, 訪問教育研究2014, 27, pp. 33-35.
- 10) 後藤 宏・長野恵子 (2015) 学齢超過者の訪問教育授業における回想法の試み, 西九州大学子ども学部紀要, No. 6, pp. 57-77.
- 11) 志村ゆず (2005) ライフレビューブック—高齢者の語りの本づくり, 弘文堂.
- 12) 中央教育審議会初等中等教育分科会 (2012) 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」 (平成24年7月23日付), 文部科学省.
- 13) 内閣府 (2013) 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律 (平成25年法律第65号).
- 14) 西日本新聞 (2007) 障害者の学齢超過者就学問題, 2007年2月11日朝刊28面 (「The Nishinippon Web」〈<http://www.nishinippon.co.jp/wordbox/word/4823/4636/>〉) にも掲載)
- 15) 野村豊子 (1998) 回想法とライフレビュー, 中央法規出版
- 16) 野村豊子 (2006) 高齢者にかかわるすべての人へ第3回「高齢者の共感の力と思い出パートナー」, 月間総合ケア, 16(8), 医歯薬出版株式会社.
- 17) 野村豊子 (2011) Q & Aでわかる回想法ハンドブック「よい聴き手」であり続けるために, 中央法規.
- 18) Butler, R. N. (1963) The life review: An interpretation of reminiscence In the aged. *Psychiatry*, 26, pp. 65-75
- 19) 福岡県教育委員会 (2009) 「学齢超過者に対する訪問教育実施要領」 (平成 21年1月31日から施行)
- 20) 文部科学省 (2007) 「特別支援学校の推進について (通知)」 (平成19年4月1日付, 19文科初第125号).